

# 第1号議案 政治・組織活動の総括

## 【1】2013年7月参議院議員選挙総括

2012年7月の結成総会以来、1年間の準備を経て取り組んだ参議院選挙では、議席獲得の目標を達成できず、敗北しました。一方で選挙戦での全国的な活動および選挙後のマスコミ報道などを通じて、緑の党の存在を全国にアピールすることができました。今回の参院選の結果を受けて、反省すべきところは厳しく反省し、得られた成果を拡大していくことによって、3年後の参議院選挙の勝利につなげていきます。

以下に、これからの緑の党発展のために反省点と成果をまとめてふりかえります。

なお、参議院選挙に至る過程で大きな節目となった衆議院選挙、東京都知事選挙については別項にて述べます。

### 1. 目標の最低1議席、得票率2%を達成できず

私たちは参議院選挙に挑戦し、比例区での1議席獲得とともに得票率2%を達成し、政党要件の獲得をめざしました。9人の比例区候補者、1人の兵庫選挙区候補者を擁立して取り組みましたが、全体で45万票(0.86%)と議席獲得はできませんでした。政党票8割(96万票)、個人票2割(24万票)という目標でしたが、政党票は24万票、個人票が三宅17万票+他個人票4万票と、三宅票を除けば、いずれも大きく届かずという結果となりました。

### 2. 3つの背景

#### 2-① 政治的背景／自民党の圧勝と共産党の伸び、山本太郎氏の当選

参議院選挙の全体的な結果としては自民党の圧勝でした。政権交代に期待した多くの市民は失望し、先の衆議院選挙と同じく棄権に回り(約670万票)、低投票率(52.61%)により、自民党、公明党、共産党が組織票によって躍進する結果となりました。共産党は東京都議選でも躍進し自民党の批判票の受け皿となり、民主党は二大政党の一翼から転げ落ちるほどの凋落、維新の会、みんなの党も伸び悩みました。

こうした中、争点が経済・雇用政策となり、脱原発政策は争点からはずされました。有権者はアベノミクスに不安を抱きながらも経済の先行き不安の中、自民党を消極的に選択しました。私たちは「脱原発による雇用創出」「ドイツでの雇用拡大の実績」を訴えましたが、浸透しませんでした。

一方で都市部を中心に、共産党が「アベノミクス」に対抗する勢力として、また「脱原発票」の受け皿として票を集めました。さらに東京選挙区では市民に支えられた脱原発と脱被ばく・反TPPを掲げた山本太郎氏が当選しました。しかし、これらの有権者の支持は私たちが獲得をめざした対象であり、獲得できなかった分析が必要です。

#### 2-② 主体的背景／私たちの力量不足 基礎的組織力が小さく、ひろがりをつくりきれなかった

会員数(会員・サポーターで1500人弱)・地方議員数(60人弱)は選挙を行うには十分な体制ではありませんでした。党内外の自治体議員へのアプローチも不足していました。数だけではなく、会員外のボランティアを含め、選挙により深く関わってもらう努力と巻き込む力が必要でした。浮動票獲得をめざしたいいわゆる「空中戦」に頼りすぎたのではないかという反省も残ります。また、選挙実務作業は東京事務局に集中するため、各地域からの支援体制なども課題です。

3月には都道府県単位の「地域窓口」を設置しました。名簿の提供も含めて地域の中での交流促進をめざしました。一部は成功しましたが、役割の不明確さ、特に地域組織との役割分担が課題となりました。

事務作業の分担が不十分な中、特定の人に仕事が集中し、複数のかなり異なった役割を担うことになりました。特に他の政治勢力や市民団体・組織などとの渉外関係に課題を残しました。

「脱原発勢力」の受け皿づくりとしての「統一名簿方式」の追求が長引いたことは、選挙ハガキの作成の遅れなど選挙準備に悪影響をもたらしました。

また、各選対の動きを全国的に調整し、戦略的に動かすことができませんでした。選対同士や選対と会員との情報共有も十分ではありませんでした。特に比例区非拘束名簿という選挙制度の特性に沿った活動ができたか反省点が残ります。街頭での不特定多数への訴えだけでなく、確実な個人票の積み上げ戦略が必要であったとの指摘もあります。

#### 2-③ 選挙事情の背景／「みどり」名称の混乱とマスコミの「諸派」報道

政党要件のある「みどりの風」は、参院選の特集記事やテレビニュースなどの報道で政策などが紹介され、政党票は32万票を超えました。みどりの風(略称登録

「みどり」)との名称による混乱は最後まで払拭できず、有権者に「緑の党」を十分に浸透させることができませんでした。一方、マスコミは、供託金という厚い壁を突破したにもかかわらず、緑の党を「諸派」として扱い、比例区報道では徹底して無視しました。2004年の「みどりの会議」の立候補の際にはあった「マニフェスト紹介」の報道すらありませんでした。この二つの背景により、有権者の選択肢として「緑の党」がメディアにおいて見えない存在となりました。その結果、「緑の党」的な政党を求める有権者の投票が分散してしまい、24万票(政党票)の得票に留まりました。

今後は選挙中に行った公正な報道を求める問題提起の継続やオルタナティブメディアの活用が課題になります。

### 3. 選挙戦術上の課題

#### 3-① 「予備選挙」実施と候補者擁立

「自分たちの1票で候補者を選ぶ」という会員の権利と、会員自身の立候補する権利を確保するため、また対外的にアピールするために予備選挙を2回行いました。

第1次予備選の投票率は43.7%、第2次予備選は52.8%でした。第2次予備選では7人が立候補し、候補者選定委員会が選挙プロモーションを行ったため、投票率は上がりましたが、いずれも投票率は低調で課題が残りました。一方で党内民主主義の確立や全国紙に取り上げられるなど一定の効果はありました。

予備選挙と直接選出という候補者の決定の二つの役割を候補者選定委員会が担いました。この負担が過重であったことも、10人の候補者決定が6月9日臨時総会寸前まで遅れた要因の一つでした。9人目、11人目の候補者が福島原発事故による避難者、12人目の候補者が三宅洋平氏であるなど、「最後までより良い候補者追求」が功を奏した面もありましたが、選挙準備、有権者への周知などを考えると、もっと早い時期での選出が望ましく、課題が残ります。

#### 3-② 「市民が立ち上げた新しい政党」「ドイツ緑の党との連携」は評価が分かれる

「市民が立ち上げた新しい政党」というアピールは、力の弱い「新しい政党」への期待よりも、政治的決定への影響力ある投票として共産党が選択されるという結果となりました。「脱原発を実現したドイツ緑の党との連携」は、緑の党が日本で十分に知られていないこともありましたが、その国際性は一定の評価を受けました。しかし「脱原発なら緑の党」というアピールは、国内での力不足のために信用される受け皿となりませんでした。

一方で「『脱経済成長至上主義』や『スロー・スモール・シンプル』など新しい価値観を全面的に打ち出すべきであった」という指摘もあります。

知名度の低さを打開するために、選挙公報を最大限に利用する方針のもと、比例区9人を擁立し、選挙公報の半面分のスペースを確保しましたが、期待通りの反応は得られませんでした。その効果の検証は難しく、「選挙区で多数擁立した方が効果的」という意見もあり、選挙区での擁立効果と選挙公報スペース増の効果との兼ね合いは今後の課題です。

### 4. 選挙における成果

#### 4-① 供託金を集め「緑の党」としてデビューした

多くの寄付者の協力により9000万円(供託金負担分を含む)を超える選挙資金を集め、「緑の党」として国政選挙に挑戦できたことは大きな第一歩です。国会議員(元職も含めた)なしの試みとしては稀なことであり、国政政党とも対等に戦えたことは緑の党への広範な期待と選挙の担い手が存在したことを明らかにしました。

選挙後も「緑の党の今後に期待する」として参加を求める人々があり、厳しい結果ながら、今回の参議院選挙への挑戦を通じて「緑の党」として社会的にデビューした意義は大きいと言えます。

#### 4-② 三宅洋平氏の「選挙フェス」がブレイク

緑の党推薦候補として比例区選挙の一翼を担った三宅洋平氏は、「選挙フェス」とネットの融合で一大ブームを巻き起こしました。17万票の個人票獲得は、他の政党では当選ラインであり、選挙後もNHKをはじめ、テレビや新聞などマスコミに注目され報道が続いています。三宅氏は政治団体「日本アーティスト有意識者会議：N A U」の代表であり、2000万円をネットで集め、自らの供託金600万円を拠出して緑の党の候補者として全国的な選挙を展開しました。三宅氏のこれまでの生き方と主張が緑の党の政策に合致していたからこそ「選挙フェス」の大ブレイクにつながったと言えます。

三宅氏のような新しい感覚を受け入れる土壌があることも緑の党の強みです。

#### 4-③ 多彩な候補者を擁立することができ、基盤が広がった

三宅氏以外にも、福島原発事故による避難者、アイヌ民族、自死遺族など当事者性をもった多彩な候補者を擁立することができました。

選挙によりネットワークや担い手が大きく広がった地域もあります。例えば、地域政党である東京や千葉の生活者ネットワークが政策協定を結んで候補者推薦を表明するなど具体的な動きにもつながりました。

また、政策立案を透明化し選挙公約「いのちをつむぐ緑のプロジェクト」とした成果、選挙マニュアルの整備など基本的な資料も準備することができました。政見放

送も評価が高く、ネット解禁にあわせて実際の放送以外にも活用することができました。

選挙も一つの大きな運動であり、一緒に運動をして汗を流した仲間こそ信頼できて議論もより深くなります。貴重な全国選挙の経験を今後活かすことが求められます。

## 5. 三宅洋平氏との統一行動は成功 脱原発連合型選挙に課題は残す

緑の党としては、統一名簿方式の選挙も視野に最後まで調整に努力しましたが、諸状況により広い枠組みでの統一はかないませんでした。

しかし、交渉の過程で「熟議を大事にする組織」や「国際性」が評価されて、政治団体「日本アーティスト有意識者会議：NAU」の三宅洋平氏との統一行動（比例名簿に搭載）に結びつきました。

一方で、国政政党「みどりの風」との連合をすべきだった／山本太郎氏との連合をすべきだった／衆議院選挙後の早い時期での交渉をすべきだった、という指摘があります。しかし、議員中心で組織風土の違いがあり、吸収合併路線を譲らなかった「みどりの風」との連合は困

難でした。山本太郎氏との連合も「緑の党」の名称を含む統一名簿方式での合意ができませんでした。

最終的な結論は臨時総会を開催して決定しましたが、会員への交渉過程の情報公開のあり方など課題は残りました。

## 6. 反省すべきところは反省し、今からが「緑の党」の勝負

さまざまな障害を乗り越えて 45 万票を獲得し三宅洋平氏による「選挙フェス」ブームを巻き起こした緑の党は、2013 年参議院選挙を通じて次の飛躍に向けた基盤を構築できたと考えます。

選挙における 3 つの成果を拡大し、地域基盤のせい弱さをはじめとする主体的力量や選挙戦術上の問題点を改善し、2015 年の統一自治体選挙や 3 年後 6 年後の参議院選挙にも「緑の党」として挑戦し続けることが必要です。

その手法として、今回の事実上の単独挑戦以外にも、結成総会での議決で示した「統一名簿方式」などさまざまな可能性も追求していくことが求められます。

## ○補論：2012 年 12 月衆議院議員選挙・東京都知事選挙に関する総括

参議院選挙に至る経緯で、大きな節目となった衆議院選挙、東京都知事選挙についてその意義などを述べます。

### (1) 「脱原発連合」による衆議院東京比例区ブロックへの挑戦及び単独挑戦の断念

緑の党は結成以来、2013 年 7 月参議院選挙への挑戦と時期未定の衆議院選挙への準備を行ってきました。

衆議院選挙については知識人や幅広い市民団体と連携し、「脱原発連合」型選挙の東京比例ブロックでの実現をめざしました。

著名人を中心にした立候補の要請や団体間での話し合いを行っていましたが、十分な準備が整わない段階で解散総選挙を迎えることとなり、断念を余儀なくされました。すでに都知事選挙が先行し、応援体制に参加していたことも一因です。「緑の党」による小選挙区での単独挑戦も一部に議論されましたが、当選可能性がない中で「本命」たる 2013 年 7 月参議院選挙への悪影響を考えると断念しました。

一方で、候補者としての交渉相手のひとりであった山本太郎氏が、無所属ながら杉並区からの立候補を決意。緑の党が高円寺の党事務所を選対事務所として提供するなど全面的に支援しました。この選挙で「太郎フェス」と銘打った音楽と演説を融合した街頭演説スタイルが生まれ、参院選の「選挙フェス」につながりました。そして、その中心を担った三宅洋平氏が緑の党から参院選に

立候補を決意する基盤となりました。山本氏は 7 万票を超える得票で民主党、共産党など既成政党をおしのけて次点となりました。

また、東京比例ブロックでは断念した「幅広い脱原発勢力のブロック」は、東京都知事選挙で、共産党から未来の党および市民団体までの幅広い枠組みとして実現しました。当選にはいたらなかったものの、100 万票近い得票を得ました。

### (2) 衆議院選挙の全体情勢 「未来の党」の失敗、民主党の大敗 自民党復調

解散後、公示直前に嘉田滋賀県知事や飯田哲也氏の主導で「未来の党」が結成され、「脱原発連合」的政党として期待を集めましたが、失速して大敗しました。もともとの地域基盤のなさ、小沢系とそれ以外の確執などが比例順位で明らかになるなどで国民に失望感が広がりました。

緑の党は未来の党候補などへの幅広い推薦に取り組みましたが阿部知子氏以外は当選せず、大敗による徒労感が広がり、「あいまいな連合」への嫌悪感が先行しました。

衆議院選挙全体では、未来の党以外にも民主党が大敗し、維新の会やみんなの党も想定されたよりは伸び悩む中、自民党が全体の票は伸びなかったものの本来の地盤を活かして復調しました。この自民党復調の流れはさらに加速して参議院選挙につながりました。